

演題名：大学病院の看護師に倫理的実践が求められる臨床場面に関する調査
—職位(副看護師長とスタッフ看護師)による比較—

○ 廣瀬 泰子 1), 三日市 麻紀子 2), 渡邊 真紀 3), 市村 尚子 4), 越村 利恵 5), 西村 路子 6), 江藤 由美 7), 井川 順子 8), 池 美保 9), 秋山 智弥 10), 松浦 正子 11), 江守 直美 12), 鈴木 美恵子 13), 小藤 幹恵 14), 米道 智子 15)
1) 岐阜大学医学部附属病院 2) 富山大学附属病院 3) 金沢大学附属病院 4) 日本看護協会 神戸研修センター 5) 大阪大学医学部附属病院 6) 滋賀医科大学医学部附属病院 7) 三重大学医学部附属病院 8) 京都大学医学部附属病院 9) 大阪大学歯学部附属病院 10) 岩手医科大学 11) 日本赤十字豊田看護大学 12) 公益社団法人福井県看護協会 13) 浜松医科大学医学部附属病院 14) 公益社団法人石川県看護協会 15) 公益社団法人富山県看護協会

【はじめに】副看護師長(以下, 副師長)は倫理的看護実践のモデルとしてスタッフを育成する重要な役割があるが、その職位によって倫理的問題の体験頻度等に影響があるかは明らかにされていない。そこで、大学病院に勤務する看護師の倫理的問題の体験頻度、体験後に生じるわだかまり“もやもや感”の程度について、副師長とスタッフについて調査し比較した。【目的】副師長とスタッフの倫理的問題体験頻度等の違いを知り、看護師の倫理的看護実践力向上の教育資料とする。【方法】2017年12月～2018年9月の間に12国立大学病院に勤務する看護師690名を対象に調査し、本稿では経験年数10年目以上の副師長63名、スタッフ130名のデータを対象とした。調査はFryらによるthe Ethical Issues Scale尺度の日本語版(以下、EIS)を用い、郵送法で行った。「体験頻度」や「体験後のジレンマから生じるもやもや感」を点数化し、t検定で平均点を比較した。【倫理的配慮】滋賀医科大学倫理委員会の承認(K29-1290)を受けた。尺度の日本語版開発者に使用許諾を得た。対象者に回答は自由意思に基づき、協力拒否による不利益はないと文書で説明した。【結果】EIS32項目中26項目が副師長の体験頻度の平均点がスタッフより高く、「20.患者に安全確保のために身体抑制や薬剤による鎮静をするか、しないか」で副師長(平均点 1.79±1.02)、スタッフ(平均点 1.31±1.09)($p=0.005$)「2.患者や家族の意向に反して患者の治療をするか、しないか」は、副師長(平均点 1.27±0.92)、スタッフ(平均点 0.87±0.90)($p=0.0062$)と副師長が有意に高かった。“もやもや感”の程度では、項目20.は副師長(平均点 2.10±0.85)、スタッフ(平均点 1.70±0.95)($p=0.0165$)、項目2.も副師長(2.44±0.72)、スタッフ(平均点 2.13±0.84)($p=0.0446$)と副師長が有意に高かった。【考察】スタッフは患者の身体抑制を日常的に経験し、安全優先上やむを得ないと認識している。一方、副師長は身体抑制を倫理的問題と認識し、加えてコンフリクトな問題でもあると捉え、もやもや感の程度が高いと考えた。【結論】副師長の倫理的問題の体験頻度・体験後のもやもや感は、スタッフと比較して程度が高かった。